

教養科目「書道芸術」の授業実践研究

―平成二年度新潟大学放送公開講座「良寛の書と生涯」のビデオ教材による―

新潟大学教育人間科学部 加藤 信 一

はじめに

教養科目「書道芸術」の授業を、書道科の専任教員四名がローテーションで担当してきた。一期二単位(半年)の講義なので、二年に一回、担当がまわってくる。

平成十一年度前期の授業には、医学部、歯学部を除く七学部(人文学部、教育学部(教育人間科学部)、法学部、経済学部、理学部、工学部、農学部)の学生二三二名の受講があった。定員二〇〇名をオーバーしたが、聴講制限をせずに授業を行った。

授業は、私が主任講師をつとめた「平成三年度新潟大学放送公開講座・良寛の書と生涯」のビデオ(BSN新潟放送制作)を上映し、教科書にはその講座をまとめた『良寛の書とこころ―騰々天真』(新潟日報事業社刊)を用いてより完全を期した。

授業時間90分のうち、ビデオの上映時間が30分。上映前にその時間のテーマについて概要を講義し、上映後にいくつかの重要なポイントにしほって補足するようにした。最後に簡単な感想文の提出を求めた。

それは受講生の数が多いため、出席をとる時間的ロスが大きく、出席確認を兼ねるとともに、講義が一方通行にならぬよう、前回の授業の感想文の中から何点かとりあげて紹介し、質問については答えて、双方向性をもたせるねらいもあった。

この頃、小中学校で学級崩壊がおこり、授業が出来ない、という話を聞く。大学も例外ではなく、私語が多く、授業が成り立たないというニュースが伝えられる。しかしさすがは新潟大学の学生。七学部の混成教室にもかかわらず、受講態度はすこぶる真面目で、真剣である。特に回数が進行するにつれて、目の色が変わってきたというか、くいついてくるようになったというか、講義をする私の方が、時に感動を覚えるほどであった。

感想文はほんの十分くらいの短時間に急いで書かれたにもかかわらず、その内容はきわめて濃密で、そのまま破棄してしまうのは勿体なく、私が応答した部分も含めて、ぜひ記録にとどめておきたいと思うにいたった。

授業15回のうち、第一回は平成四年二月「第九回放送利用の大学公開講座シンポジウム」に上映された本講座の「スクーリングの記録」(BSN新潟放送制作)のビデオを用い、いわゆるオリエンテーションにあて、感想文は求めなかった。途中公務出張のため一回休講があり、試験時間は別にして、実質的には合計13回分の収録となった。

なお学生の氏名は記載せず、学部名の略称にとどめた。個々の学生に事前の承諾を得なかったことをおわびするとともに、採用のお礼とご了解をお願いする次第である。

以下、はじめに学生の感想文、それに対する私のコメント、という形で稿を進めることとする。

第一回 良寛の足跡をたどる

① 父親は京都で川に身を投げたということですが、テレビで「実は良寛が父親を殺したのではないか」ということも言われているので、そこも気になるところです。(人)

テレビが具体的にどの局のどの番組かわからないが、テレビの影響は大きいから恐ろしいと思う。直接的に良寛が父親を殺した事実は考えられないが、間接的には、良寛が父親の名主職を継がずに出家してしまったため心を痛めるようなことがあったかも知れない。

良寛の父・以南が、京都の桂川に身を投げたのは、寛政七年七月二五日、六〇歳の時といわれる。良寛三八歳の出来事である。しかし良寛自身は、以南が高野山に身をかくした説を信じていたらしい(教育人間科学部紀要第一巻第一号拙稿「良寛の関西紀行考」参照)。

② お坊さんの修行が気になりました。肉や魚を食べないで、ずっと座禅を組んだり、薪を運んだりして、病気になるやすかったのでは、と思います。

それに托鉢に出たのは月に一、二度だったというから、どうやって食べていたのだろうかということが、すごく気になります。野菜などは栽培していたのでしょうか。(教)

たしかに僧の食事は粗末で、栄養が十分とはいえない。良寛はどちらかといえば病弱で、風邪をひきやすく、下痢しやすい体質であった。

ただ岡山の円通寺時代でも、修行の一つに作務さむがあり、座禅や読経、講義や写経とともに、掃除をしたり畑を耕す労働も、重要な修行であった。

良寛の兄弟子だった仙桂和尚は「園菜を作って大衆に供養す」(良寛の詩)る人だったが、良寛は「仙桂和尚は真の道者」(良寛の詩)と言ってほめたたえている。

③ 今回、良寛の生涯をビデオで見て、なんとなくだが、そのあたたかい人柄がうかがえた気がした。真心尼や円通寺もできてこれからの授業が楽しみだ。新大にあるなぞの像も良寛だとわかったのでよかった。(法)

なぞの像、にはまいった。なるほど台座の正面に「天上大風」と書かれているだけで、どこにも「良寛」の説明がないから、天上大風ニ良寛、のイメージを持たない人にはわからないのも無理はない。

この像は昭和57年7月、それまで新潟、長岡、高田の三地区に分かれていた教育学部が五十嵐地区に移転統合し、九階建ての新校舎が完成した記念に、同窓会、後援会等の皆さんが寄贈して下さったものである。当時学部長をしていた篠原正敏教授が「新潟大学は良寛大学であるべきだ」と発言されたことがきっかけになった。

なお、大学の構内に良寛像が建立されたのは、玉川大学が第一号で、新潟大学は第二号にあたる。制作者は茂木弘次氏。

④ (良寛が)結婚しなかったのはなぜだろうか。良寛の人柄の良さなら素敵な人と出会えたらうに。(経)

山や寺院を聖地と見、女性を不浄と見る思想が長く続いた。したがって女人禁制がしかれたり、僧の妻帯が禁止された。妻帯が認められるようになったのは、ようやく法然、親鸞の時代になってからである。良寛が修行した禅宗では特にきびしかった。僧の修行はある意味で命がけだから、女性との接触は心にゆるみを生じ、妨げとなったのかも知れない。

しかし男性にとつて、女性はこの世で最も美しい存在であり、女性なくして子孫を残すことは不可能だから、これは困った話である。禅のキーワードとして「無」とか「空」とか言われるように、出家することは欲望を断ち切ること、無欲に徹することだから、結婚もその対象とされたのである。

ただ良寛の晩年、貞心尼と出会ったのは、何よりの幸せだった。

⑤ 良寛さんは一生清貧ですごしたそうだが、私にはとても無理だ。お金がないときは不機嫌だし、食うものがないとイライラする。(理)

それが正常な人間というもの。

⑥ 僕は今、オリエンテリング部に入っており、実際オリエンテリングを開くために「良寛の里」という所の周辺の地図を作りました。初めは良寛って何だろうと思いましたが、この講義で納得しました。(工)

良寛へのアプローチの仕方は色々あるので、オリエンテリング大いに結構。

⑦ ところで私は習字を習っていましたが、「良寛さん」の字はいまひとつうまいとは思いませんでした。だからこれからの授業を通じて、字の芸術も勉強したいと思います。(工)

良寛の字がうまいかどうか、むずかしい問題。超絶技巧、人間わざをこえた摩訶不思議な書とも言えるし、スキだらけで子供のようにあどけない書とも言える。書法にのっとりながら、書法にとらわれない。いうならば「法に入りて法を出ずる」書であり、「守↓破

↓離」の境地を達成した書でもある。

⑧ それにしても何もないただ林の中で、寺の中で、一人で何年も暮らしていくというのは、さみしくて死んでしまいそうだ。あんなところで一人で暮らすのは、ごめんだな、と思います。(工)

それはその通り。「山上独居」「独処草庵」が修行なのだから……。

第二回 良寛の書をたずねて(工)

—良寛出生の地・出雲崎

⑨ はじめて書というものを勉強するわけだけど、草書はわかるまで部屋にかざっておくという方法は、とてもすばらしいと思いました。(人)

たとえば「草書千字文」とか「常用漢字の草書一覧表」とかによって、草書の基本的な形を覚えてしまえば、そんなに読みにくいものではない。あとはどうしても読めない字に出くわしたら、一年でも二年でも、読めるまで眺めることである。

⑩ 書道には、楷書と行書と草書の三つがあるということは知っていたけれど、平がなと変体があるということは知らなかった。変体があるについては、あて字がすべてそうなのだと知り、覚えるのが大変だなあと考えた。(教)

正確にいうと、楷書、行書、草書は漢字の三体。かなに平がなと変体がある。ただし、平がなと変体があるとの区別が生じたのは、明治33年(一九〇〇年)小学校令によって、平がなが制定されてからである。それまでは平安時代中ごろにかなが発明されて以来、

変体がな概念はなかった。したがって明治以前の記録には、変体がな万葉がなともいわれ、自由に使われていたのである。平がなだけ読み書きが出来ればよい、という考え方に立つと、明治以前の文献が読めない——即ち、日本人でありながら、日本の文字がわからなくなる恐れがある。

① 人名や場所等のポイントはしっかり書くところから察するに、やはり良寛の人柄——礼儀正しさとでも言おうか——が基本にある、その上に良寛風の自由さ、自然さが、書体の様々に表れているのだろう。(法)

良寛の書に、礼儀正しさが基本にある、という指摘は、するどいと思う。現代の書道が、とかく礼儀など忘れ、生命や情熱の表現とキタナイ表現とを混同する傾向にある時、何よりの警鐘でもある。

② 良寛記念館をたてるのに一人から10円ずつ集めたらしいけど、どうせだったら10円なんて額ではなく、100円ぐらい集めれば一八〇〇万円になり、もっと色々なことができたのではないだろうか。(経)

さすがは経済学部の学生だ。昭和35年、良寛生誕の地・出雲崎町に良寛記念館建設計画がたてられた時、県内の小中高校生から一人十円の募金をお願いして一八〇万円余の浄財が寄せられた。たしかに一八〇万円ではどうにもならないが、涙ぐましい話ではある。

結局、良寛記念館の開館式は昭和40年5月15日だったから、募金活動を始めてから五年の歳月を要した。今から40年ほど前の10円は、どれほどの値打ちだったのだろうか。

⑬ (良寛の作品に) 左に余白があるのがあり、「これは良寛の

余白の精神」といっているが、本当だろうか。ただ文章が短かっただけじゃないのか。(工)

これは思いがけない感想文。良寛の作品に「そめいろのをとづればよよるのかり」の一句を書いたものがあるが、一紙のほぼ右半分文字を書き、左半分は余白のまま残している。その余白をどう見るか、である。

別の学生は「日本人独特の、白紙の部分に価値を見出すという美意識(教)」と書いていた。これはいわば模範的・常識的な感想。本当の余白と、ニセの余白との違い。故金原省吾先生の教えでは、例えば山を描いた絵を逆さにすると、山が下に落ちる絵と落ちない絵とがあり、余白が生きているかどうか判断がつくのだそうである。

第三回 良寛の書をたずねて(II)

—良寛修行の地・円通寺と須磨寺

⑭ 座禅は何の為にものならないからこそやる、といていたが、「効率を目指さないため」という立派な目的があるではないか、と思った。(人)

⑮ 「なんにもならない」というのは、社会に対して実利的、生産的でないという意味で、精神的には何かしら得るものはあるのではないかと思いました。そういう意味では、哲学と非常によく似ていると感じました。(工)

どちらも非常にするどい指摘。これは沢木興道師が九州で講演した時、「なぜ座禅をするのか」という学生の質問に「何にもならないからこそするんじゃ」と答えた話をふまえている。新潟大学の学生もなかなかレベルが高い。

⑩ 今回出てきた俳句の「うらをみせおもてをみせてちるもみぢ」という句は、美しく素敵な句だなあと感じます。(教)

この句は貞心尼が「生き死にのさかひ離れてすむ身にも、さらぬ別れのあるぞ悲しき」と詠んだ歌に対して、良寛が息をひきとる前、最後に口からもれた句として有名。「散る紅葉」は良寛自身。「裏も表も」はすべてとも解されるが、表が建前なら裏は本音。また一枚の葉を考えれば、裏のない表、表のない裏はなく、表も裏も同じ一枚の葉。表をこの世とすれば、裏はあの世。表裏一体、生死一如。だから生き死にのさかひは無いのだよ、そんなに悲しみなさんな、と言っているようにも受けとれる。

六祖慧能の「葉は落ちて根に帰す」(『祖堂集』)をふまえているのではなからうか。

⑪ (抽象彫刻家は) なんとというか、本当の泉のようなアイデアと才能がなければネタができてくるし、人のまねをすればたたかれりし、年中胃が痛いと言っていました。私が思うに「抽象」という仕事は技術、労力もさることながら、やはりアイデアと自信が命なのだ、と思います。(法)

⑫ 抽象彫刻家なら美術の苦手な私でもなれるかなと思った。

(経)

前出の13と同様、感想が二つに割れた。抽象彫刻家が制作したある良寛像には、目、鼻、口などの顔がなく、手や足もないものがある、という話からのもの。具象と抽象——絵画に例をとれば、具象画なら一生富士山だけとか、人物、花鳥だけとかを描いても、誰も文句をいわない。ところが抽象画の場合、一作めにある抽象形を

描き、二作め同じパターンだと抽象にはならない。

マンダラの画家といわれる抽象画家の前田常作氏は、そのため、行きつまってしまった。マンネリから脱皮する手段として、毎日一作の絵日記を自らに課し、新しいアイデアに挑戦されたそうである。他方、粘土を円筒形に固めて、これがある人物像だと主張しても、それはそれなりに通用する可能性もあるであろう。

⑬ 新潟から岡山へ行くのは、当時としては大変な苦勞と時間をかけたのだらうと思う。修業の意味がよくわからなかった。修業の最終的な到達点には何があるのかと思った。(経)

これはむずかしい問題。大きさにいえば、禅、仏教、宗教とは何か、という問いにつながる。

一般的には、修業の最終的な到達点は、迷いの世界を脱却して悟りの世界に到達するのであるが、その悟りにいろいろな説明がなされている。しかし悟ってみれば「柳は緑、花は紅」であり、「眼は横に、鼻はまっすぐ」であることに気づくだけのものである。

⑭ 良寛が弟子の中でも師のあとを継ぎ、円通寺をも継ぐだけの資質を国仙和尚はどうして見いだしたのだろうか。(理)

弟子がすぐれた師匠を見つけるのもむずかしいが、師匠がすぐれた弟子を見つかるのもむずかしい。弟子の資質を見抜くのは、お見合いの第一印象と同じで、理屈ではなくて直観、あるいは靈感によるひらめきではなからうか。

空海(弘法大師)を迎えた師の真言七祖慧果阿闍梨は、初対面の時「吾れ汝を待つこと久し、来ること何ぞ遅きや、生期まきにおえなんとす、精勤して早く受けよ」と述べ、真言の奥儀を授けた。空海は日本真言宗の開祖となったこと、衆知の通りである。

また道元が初めて師の天童如浄に出会った時のことを、道元自身「大宋宝慶元年乙酉五月一日、道元はじめて先師天童古仏を妙高台に焼香礼拝す。先師古仏はじめて道元をみる。」(『正法眼蔵・面授の巻』)と感動的に書きとどめている。「先師古仏はじめて道元をみる」とあるように、一目で道元の資質を見抜いたのである。道元また、日本曹洞宗の開祖となったこというまでもない。

国仙と良寛との間に、慧果と空海、如浄と道元の場合と同じように、ビビッと電気が走ったのであろう。

② 良寛はいつてみれば、所属していた流派の不良であるように思えた。体制にそむいていたという事でそう思ったのだが、人物がすばらしく、それなりの思想があれば、反体制というのは何かをかえる良い行動だと思う。(工)

暴力的、破壊的な反体制は肯定出来ないが、改革、革新、進歩には、体制に従順であるよりは批判的色彩の方が強いであろう。

良寛が師匠の大忍国仙を失ったあと、円通寺を出たことについて、北川省一氏は、良寛が曹洞宗から追放されたのだ、とする説を出された。それに対して柳田聖山氏は、逆に良寛の方が曹洞宗に見切りをつけてとび出したのだ、とする説を出された。広くは当時の仏教界の墮落、あるいは、それこそ体制的な仏教界の現実に絶望したというのである。

しかし追放も逆追放も、いささかおだやかではないので、私は国仙から印可の偈(一種の卒業証明)を与えられた良寛が、師の教えに従い、正師を求めて諸国行脚の修行に出たと解釈している。それが結果的には曹洞宗との縁が切れ、全く一コジキ坊主、単なる僧としてさえ認められないことになった。その意味では確かに不良であり、反体制的存在であった。

良寛が曹洞宗から正式に認められるようになったのは、文献の上

では、昭和4年から10年にかけて刊行された『曹洞宗全書』(全二〇巻)の第八巻に、「良寛道人遺稿」(大愚良寛)が収録されたのが最初ではないかと思われる。ついで『続曹洞宗全書・全一〇巻』(昭和49〜52年刊)の第九巻に「草堂詩集」が収録されている(以上『禅学大辞典』による)。ようやく昭和に入ってから話である。また、曹洞宗が良寛の法要を営んだのは、昭和55年、新潟県曹洞宗青年会による良寛一五〇年忌法要が最初であった。実に良寛没後一五〇年を経て、やっと曹洞宗の僧として認知されたのであった。それが今や、徹底した「無」の生き方から、宗祖道元をもしのぐ名僧にまつり上げられているのである。

② 良寛は円通寺で座禅……等、毎日きびしい修業だったわけですが、あくまでも人間です。つらくなつて逃げだしたいとか、お坊さんをやめたいかと思つたことが、一度や二度あつたのではないかと思ひます。良寛の「楽しみ」といえるものはあつたのでしょうか。(工)

円通寺の現ご住職・仁保哲明師が「良寛さんは師匠の国仙和尚が大好きだったんでしょね」と言われた言葉が強く印象に残っている。師と仰ぐ人物が大好きだったから、修行がつらいこともなく、逃げ出したいと思うこともなかったのではなからうか。

毎日、朝三時に起床、一日に座禅四回、読経三回、講義、作務(労働)と休まるひまもなく、三度の食事は一汁一菜、九時に就床。「座つて半畳、寝て一畳」といわれるように、タタミ一枚が自分の全生活空間。こんな生活が普通の人に出来る筈がない。

ただ、円通寺時代の良寛の楽しみとしては、読書や作詩があつたと思われる。読書は専門の『法華経』や『正法眼蔵』等の仏書のほか、いわゆる外典と呼ばれる文学書の類も、かなり自由に読んでいたようである。また漢詩は既にかなり大量に詠み、和歌も作り始め

ていた。それにつれて書も書いたのであろうが、良寛の円通寺時代の筆跡が現在に伝えられていないのは残念である。書の本格的な練習は、越後へ帰ってから四十歳以後と推定される。

② 昼寝がそのまま修行になるような……というのは一体どのようなものだろうか。もしそんなことができたなら、私の生活は修行そのものになるのではないだろうか。すごいことだ。

それにしても玉島中学校にかよってなくて本当によかった。夏休みなのに五時三〇分から一時間座禅なんてつらすぎる。その習慣はいつか誰が考えだしたのか。まったくめいわくなことを考える人だ。(農)

この感想文はたいへん愉快。

良寛が師の国仙から与えられた印可の偈に

良や愚の如く、道うたた寛し、

騰々任運、誰か看ることを得ん、

為に附す、山形爛藤の杖

到る処の壁間、午睡閑たり。

とあり、その末句のこと。禅の修行は結跏趺坐して座禅をするだけとは限らず、日常の食事や歩行はもとより、洗面や排便さえ立派な修行なのである。まして昼寝が……というわけである。だから毎日の生活が修行そのものとはすごいことだ。

一度早朝座禅を体験してみると、また考えがかわるかもしれない。

第四回 良寛の書をたずねて〔III〕

— 良寛の知友・阿部家

② 「一生は夢のごとく」という文が特に印象に残った。歎異抄

で親鸞が「地獄は一定すみかぞかし」と言っているのと対照的で、本当に良寛さんはやわらかなものの考え方をする人だったのだと改めて思った。

とにかく地蔵と無言で話をするのだから、ただものではないのだろう。(人)

良寛が阿部定珍に宛てた手紙の中に「信に一生は夢の如くに候」と書かれている。定珍が五十歳、良寛が七十歳の時の感懐である。それが親鸞の言葉と対照的かどうかは判断しかねるが、歌人・吉野秀雄氏の随筆に「やはらかな心」があるように、良寛がやわらかなものの考え方をする人だったことは間違いない。また真言宗では「金剛心」といい、最も高い悟りの境地を不動で堅固なダイヤモンドにたとえるが、その金剛心とやわらかな心となら、あきらかに対照的といえよう。

また良寛の詩に、

間庭に百花発ぎ、余香この堂に入る、
相對して共に無語、春夜々
まさに央ならんとす。

があり、相對する相手がもし石地蔵だとしたら、無言のうちに多くの話をしていくことになる。たしかにただ者ではないが、親子、夫婦、友人等の間で、一方がこの世を去ってから、本当の会話が始まるという場合もありうるであろう。

② 良寛さんが阿部定珍さんにたくさんの手紙を書いていたというのは、良寛さんにとって、彼は欠かせない大切な人なんだなと思っただ。それにしても、人への手紙を、このように知らない人たちに見られるとは、良寛さんは考えてもいなかったと思う。(人)

手紙を書くことが、大切な人への表われと受け止めるのは卓見だと思う。

良寛の書簡は全部で二四七通ほど残されているが、宛名別に分けると、

阿部定珍宛 47通

解良叔問宛 21通

山本由之宛 16通 以下略

となり、阿部定珍宛が最も多い。定珍は良寛の好物であった酒、味噌、醬油等を贈り、良寛の生活を支えていた。また良寛と定珍とは歌を詠みかわし、それを書いた作品も多く、風雅な友でもあった。

手紙は本来、個人から個人へさし出されるもので、第三者への公開を前提としない。現代でも信書の秘密は厳守される。しかし中国書道史でも日本書道史でも、歴史的な名品に、書簡・書状が意外に多い。書道が芸術作品として書かれるようになったのは、むしろ時代がずっと新しく、記録、文書、写経、歌集、書状等が、そのまま書作品になっていたのである。

千利休、古田織部、小堀遠州といった茶人は、自分の書く手紙が、相手によって表装され、床の間に掛けて鑑賞されるであろうことを予想し、ある程度意識して書いていたのではないかと思われる。本阿弥光悦もそうかもしれない。会津八一にいたっては、自分の手紙を大切に保存するよう明記している。安田靉彦など日本画家の多くは、とりたてて書の練習に時間をさくのは惜しいから、手紙を書くことが書の稽古だと心得ていた。

私が解読し、まとめた書簡にかぎっても、

安田靉彦の書簡 三―四通

土田麦僊の書簡 五―五通

鎌倉芳太郎の書簡 七―二通

西谷卯木先生書簡集 一―〇通

と、書簡そのものがすぐれた文学であり、書作品となっている。さて良寛はどうだっただろう。

②⑥ 今回、良寛の書いた書を見て、やっぱり日本はいいなあと思いました。電話やメールよりも、自分で書いた手紙はやっぱりいいものです。私も巻物のような手紙を書きたくなりました。(教)

大変結構。ぜひ毛筆の手紙を！ 特に専門的に習わなくても、「習うより慣れろ」で、毛筆を用いて巻紙に書いていると、次第にさまになるものである。文系の人より理系の人に、案外そういう願望が強いようだ。

⑦ 良寛の「論語」や「万葉集」の暗記方法が、今の私達と同様に、コツコツと書いて覚えていくという方法だったにはおどろいた。(教)

②⑧ 今日、ビデオを見てうれしかったことは、良寛さんが天才でなく、努力家だったことです。私は今まで良寛さんは天才で、一歩も近づけない人だと思っていました。しかし努力家であることを知り、自分も近づけるような気がしました。(教)

暗記法や勉強法にはいろいろあるが、手を動かして、手を通して、身につけさせるのが、最も確実なようである。

良寛は「論語抄」一四四行を書き、貼交屏風はりまきびょうぶに貼りこんだ作品を残している(木村家蔵)。順序がまちまちなのと、語句に異同がある為、良寛は「論語」を暗記して書いて書いたものと考えられる。

万葉集も『仙覚本万葉集』全二十卷(阿部家蔵・重文)の全巻にわたり朱注を書きこんだり、万葉全歌約四五〇〇首の中から一九〇首の秀歌を選び出して「秋の野」一冊の抄出本を書き残している。『万葉集』もほとんど暗記していたと考えられる。

したがって良寛は、天才的な才能があったかもしれないが、人に倍してコツコツと努力したことも事実である。学生諸君の才能をもつ

て努力すれば、良寛に一步も二歩も近づけること、疑うべくもない。

㊹ 空海や道元など中国へ修行に行った人は、言葉は話せたのですか。(法)

話せたかどうかよくわからないが、たぶん筆談だったのではなからうか。現在では中国は簡化文字を用い、日本は新字体を用いている。両国が相談して同じ字体に統一すればよかったのに、両国が別々に文字政策を実施した結果、不便なことになった。ただし本字(正字)が廃止されたわけではないので、本字を用いれば両国共通である。戦前まで日本の知識人は、漢文の読み書きがかなり自由だったから、紙に書けば、中国人との意志の疎通はかなり可能であった。また、そうして筆談した記録が残されている。

㊺ 阿部家に保存されている良寛の書全部を売ると、いくらくらいになるのだろうと、不純なことを考えてしまいました。(経)

良寛の書には、芸術的、学術的、文化的な値打ちとともに、経済的価値も当然あるわけだから、値段を考へることは決して不純ではない。

「美術年鑑」等を見れば、現代の画家、工芸家、書家等の作品の価格が明示されているし、物故者についても、書跡は聖徳太子、聖武天皇、光明皇后等から明治、大正まで一覽表になっている。ちなみに良寛は一五〇〇万円、重文級と記載されている。

最近聞いた話では、草書十字が書かれた有名な対幅が八千万円。代表作になると一億円を越えるようである。

ただ良寛にはニセ物が多いから、購入する場合は注意が肝要だ。私の体験を一つ紹介するならば、平成九年、某裁判所から良寛鑑定の依頼を受けた。法廷で誓約書に署名し、宣誓をして、まるで映

画のシーンのようであった。良寛の小幅一点を二千万円で購入した人が疑問に思い、裁判所に訴えた。私は一目で印刷だとわかった。念の為、後日所蔵家を訪ね、原跡が流出していないことを確認して、鑑定書を書いた。印刷費と表具代あわせて金二万円也と。たちまち〇が三つおちて、二千万円が二万円になってしまった。良寛の鑑定は、時に暴力団がらみになったりすることがあるから、こわい。私は用心して、良寛の鑑定は一切お断りしている。

㊻ 良寛さんの作品はどれもすばらしいものばかりなのですが、これらはすべて「一発清書」なのでしょいか。字の形やバランスが気に入らなかつたりして書き直したりはしなかつたのでしょうか。又もし下書きや書き直しがあつたとしたら、そのようなものは見つかつているのでしょうか。(理)

「一発清書」とは面白い発想。下書きと清書との区別が明瞭になるのは、学校教育における習字の授業と、展覧会が盛んになつてからであらう。

奈良、平安時代から江戸時代まで、あまり清書という概念はなかつたようである。紙の生産量が少なく、貴重品だったこと、非常に高価だったことから、現在のように書きしくじつては丸めて捨てるわけにはゆかなかつた。国宝に指定されている文書、最高級の書道芸術作品でも、書き誤つた部分は訂正したり、脱字の分は補つたり、見せ消ちや抹消したものもある。

良寛の作品も例外ではなく、現在伝えられているものは、すべて下書きであり清書であるといつてよい。まさに「一発清書」そのもの。

展覧会作品では、一点仕上げるのに五百枚も千枚も練習することは珍しくない。それだけ書き込んで鍛錬するのである。それはスポーツ選手のトレーニングと同じである。技を競う為には、一步でも他

人の上へ出なければならぬ。

その際、注意を要するのは、マンネリ化し、パターン化する恐れがあること。寸分のスキもない完成度の高い作品にはなるが、習気（は臭気に通じる）が出ないように気をつける必要がある。

「師の前にて二つの矢を持つことなかれ」の精神も大切なのである。

㉔ 良寛さんは書を書くときに「下半分に墨を集めて全体を引き締めよう」と意識して書いていたのだろうか。それとも無意識にそうだったのだろうか。（工）

たとえば阿部家蔵の「をやまだの」の歌や、扇面の作品によく見られるように、作品の下半分に墨を集めて安定感を出す構成法が見られる。

よく書の方では「意前筆後」といわれる。前もって制作意図とか、ある程度の計算をしておき、それに筆がついてゆくのである。建築の場合は設計図を描き、設計図通りの作品が出来上がる。しかし書の場合、たとえ設計図を作ったとしても、なかなかその通りの作品が出来るとは限らない。むしろ書く度に違った作品となり、設計図とはおよそ似ても似つかぬ結果になることさえある。

「意前筆後」に対して「筆前意後」という考え方もある。恩師西谷卯木先生は剣道の立合いを例にとり、刀をどう動かすか考えていたら、さきに斬られてしまう。意識の前に、刀の方が先きだ、と言われる。

版画家の棟方志功氏は「自分の手がノミを動かすのではなく、ノミが勝手に動くのだ」と言われる。

また恩師井島勉先生は「無意識とは意識が無いことではなく、意識を集中させることである」と言われる。こうなると、ますますわからなくなってくる。

結局は、意識してそうなる場合もあるだろうし、意識はしなかったけれど、結果的に見たらそうなっていた、という場合もあるであろう。

良寛の場合も同じことだと、私は考えている。

第五回 良寛の書をたずねて（Ⅳ）

— 良寛の知友・解良家 —

㉕ 「ことばのおほき」「はやこと」「さしでぐち」「へらずぐち」を戒めるというのは、良寛らしいというか、これぞ日本の心、という感じを受ける。現代では、自分の言いたいことを全て言うのが正しいとされる傾向があるが…。（人）

㉖ 本当に他者を思って説教するならば、多くの語はいりません。多くを語ることは、時として、ただの自己満足にすぎません。そんな意味でも良寛の人柄は素晴らしいと思います。（人）

㉗ 良寛さんは子供と遊んだり、書道をしたりして、お坊さんらしいイメージがあまりなかったけれど、「戒語」を書いていたことが分かって、良寛さんという人が、どこかひきしまったイメージになりました。（教）

良寛は「戒語」をたくさん書いている。大島花束氏の『良寛全集』には、重複を含めて総計五百余か条が収録されている。ずいぶん細かい。自戒の為に書いたのか、人に教える為に書いたのか、定かでない。

目的がはっきりしているのは、「おかの宛戒語」である。これは良寛が最晩年身を寄せた和島村木村家の二女が嫁ぐ際、心得として書き与えた八か条からなる。冒頭の第一条は「あさゆふおやにつか

ふまつるべき事」とあり、第七条には「上をうやまひ、下をあはれみ、しやうあるもの、とりけだものにいたるまで、なまけをかくべき事」と書かれている。この条は道元禪師の『正法眼蔵』生死巻をふまえている。

語を戒めるのは言葉を大切にすることであり、「愛語」と対極のように見えながら、表裏一体をなすものと考えられる。

③ 良寛さんは手まりが上手だったそうですが、手まりのまりは当時何でできていたのですか。(人)

良寛が実際に使った手まりといわれる遺品が、相馬御風記念館、原田家、安田家ほかに伝えられている。現代のゴムまりとは違い、ゼンマイのわたを芯にしてその上に糸をきつく巻き、花や蝶や草木などの刺繍をほどこした美しいまりである。良寛の汗がしみこんだ手まりかと思うと、いっそう心が引かれる。

ゴムまりのようににははずまないのに、どうやってマリつきをしたのか疑問に思っていたが、分水町良寛史料館蔵、三森九木筆「良寛まりつきの絵」を見て謎がとけた。膝をついてマリつきをしていたのである。

④ まりつきにまで無限性や永遠性をみいだすとは、さすがお坊さんだと思った。(人)

⑤ 毬つきとは単なる子供の遊びではなく、集中力や持続力、リズム感などを養うこともできるなんて、今迄考えたことはなかった。(教)

⑥ なぜ、まりをつくのには1、2、3、4、5、6、7まで書いたのか。7に意味はあるのでしょうか。(経)

⑦ まりつきにおいて宇宙までもってくるところがすごいと思っ
た。(理)

⑧ 毬つきで宇宙や時間の法則まで感じとっていたというのは、
あまりにも飛躍のしすぎではないだろうか。(工)

以上五点は良寛のまりつきをめぐる感想文。たかが子供達と遊ぶまりつきだけど、40はすごいと思ひ、41は飛躍のしすぎ、と受けとめる。

39の7に意味があるのかどうか。

これは良寛詩の

袖裏の毬子直千金

おもうわれこそ好手等匹なしと

此中の意旨を如し相問わば

一二三四五六七

によっている。まりつきの極意を問う人がいたら、一二三四五六七と答えよう、と。一二三四五六七でもよいが、これは七言絶句のため、

つきてみよひふみよいむなやこのとを

とをとをさめてまたはじまるを

の短歌の方がわかりやすい。一から十までいったら、また一へもどる。そのくり返し。

歌人の上田三四二氏がこの歌をとり上げ、一から十までは直線ではなく、円をなしている、とされた。しかも十から一へうつる為には「零」がなければならぬ。零から一へ立ち上がって十までゆき、再び零へもどる。深い哲学的考察。零はいいかえれば「無」ではないのか。人の生命も、宇宙も、すべてが無から始まって無へ帰る。道元は「仏祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して断絶せ

ず。発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり」(『正法眼蔵』行持巻)と述べている。仏道は円環して断絶することがない。いわゆる円環思想である。良寛も上田氏も、この思想をよく知っていたに違いない。

世界で最初に幼稚園を作り、幼児教育の祖と仰がれるフレーベルは、幼児の遊戯及び手技の用具としてボール(毬)を考えた。マリで遊ぶ時、幼児は無意識のうち、球の法則、空間の法則、時間の法則等を予感させるといっているのである。良寛がフレーベルの理論に接したとはとうてい考えられないが、偶然とはいえ、あまりにも奇跡的な一致を見せている。

良寛は子供達とマリつきをして遊びながら、リズム感、集中力、持続力、呼吸法(教息観)、手指の運動能力等を養ったのではなからうか。

④② 良寛の書を別の人が彫ると、その書の価値はあるのだろうか。(工)

良寛の代表作の一つ「心月輪」を見た感想。ナベブタと称される円形の木に良寛の書が刻されている。刻者は誰ともわからない。本来、文字を書いた人と、それを刻した人とが同一人物であれば、全く問題がない。別人の場合、このような問いが生まれる。

多くの石碑がそうであるように、一般的には、刻者が別人でもその人の作品とされる。しかし文字を木や石に刻すること自体、独立した芸術でもある。篆刻や彫書がそれである。そこで厳密に言えば、筆者は誰々、刻者は誰々と併記し、合作とすべきであろう。

石像やブロンズ像の制作でも、原型は彫刻家作り、実際の作品は石工や鑄造所が担当する場合がある。それに似ているかも知れない。

この「心月輪」については刻者がわからないので、良寛の作品と

してよいと思う。

④③ 良寛などの書家の人達が、墨をにじませたり、かすれさせたりすると「風流」となるのに、書道大会であると減点になるのはなぜでしょうか。(教)

ここでいう書道大会とは、小中学生を対象とした競書大会、書き初め大会等のことであろう。文部省の現行学習指導要領では「文字を正しく整えて書く」のが書写の基本であることと、毛筆の指導は硬筆による書写能力の基礎を養うことに主眼がおかれていることから、墨をにじませたり、かすれさせたりするのは、必ずしもプラスになるとはかぎらない。

ところが一般の書道展になると、いわゆる芸術的表現が重要になり、文字を正しく整える必要はなく、にじみやかすれの出ない硬筆との関連を考える必要もない。また墨のにじみやかすれは、和紙(唐紙)や墨や筆などの用具と密接な関係があり、西洋では書道という芸術が成立しなかったのに反し、中国や日本では「書画」と並称されるほど芸術の一分野として早くから独自の地位を与えられた。そして人間の性情を発露する手段(表現法)に、墨のにじみやかすれは非常に有効な方法であり、線の流れ、リズム感、強弱の変化、立体感等が表現されるのである。

④④ 書道で使う墨汁の成分は、何百年たっても変わらないのだろうか。色あせてきたりするのだろうか。(法)

墨の原料はススで、それにニカワと香料を加え、よく練って型に入れ、乾燥すれば固形墨となる。液体化した製品が墨汁である。ススは炭素原子の微粒子であり、原子は化学変化によって不変だから、理論的にはほぼ永久に変色したりしない。

墨以外のインクや塗料（絵の具）は、最良の保存状態に保つても数百年といったところ。西洋の名画は常に補修の手を加えているから、厳密に言えば、原作とは次第に遠ざかってゆく。

そこへゆくと、墨で書かれた文字は、「一三〇〇年前の聖徳太子「法華義疏」、一二〇〇年前の聖武天皇「宸翰雜集」、光明皇后「業毅論」等、昨日書かれたのかと思われるほど墨痕淋漓（ぼつこんり）（墨がしたたにおちる）としている。

中国でも紀元前、文字が書かれた最初からのものが、砂漠や土や水の中に没しながら、現在まで伝えられている。まことに驚異的である。

④⑤ 良寛が曹洞宗のお坊さんなのに、真言宗の經典を学んでいたという話がありました。が、本来、曹洞宗の人は何の經を学ぶのでしょうか。（法）

④⑥ 良寛さんは真言宗に深い関心をもつて研究をしたり、真言思想へ親近感を持っていたとのことですが、それは曹洞宗のお坊さんとしては「浮氣」のようなもので、よくないことではないでしょうか。（法）

まず曹洞宗は法華經を、真言宗は大日經、金剛頂經を、浄土宗・浄土真宗は無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經をそれぞれ所依の經典としている。他の宗派でもそれぞれ依つて立つ經典が定まっている。現在では他宗派の經典を読むことはまずないようだが、良寛の時代はそれほど峻別されていたわけではなく、ある程度いりくんでいたようである。たとえば禅浄一致の思想とか、神道と仏教との融合、中国では儒教や道教と仏教との融合等、さまざまなケースが考えられる。

良寛の場合はもちろん、曹洞宗の僧だから、「法華転」「法華讚」

の著述（詩集）があるように、法華經に対する帰依が絶対的であったが、真言宗をはじめ他宗派の經典を広く読み、神道、儒教、老荘の思想等も学んでいた。キリスト教だけはその影響が見られないが、吉野秀雄氏が指摘されているように、良寛がもしキリスト教を知っていたら、躊躇なく取り入れていただろうと思われる。

こうした事情から、良寛は無宗派とか、雑炊宗とかいわれるのである。

「浮氣」はした方がよいのか、しない方がよいのか、デリケートな問題ではある。

④⑦ 解良家という精神的にも経済的にも支えてくれる人がいたからこそ、良寛さんは安心して書道、漢詩にうちこめたのだと思います。すぐれた芸術家にはやはりパトロンの存在が必要なのだと思います。中世ヨーロッパのルネッサンスによく似ていると思えます。（理）

たしかにヨーロッパでは、宮廷音楽家、宮廷画家といわれる人々の存在があった。宮廷貴族の庇護のもとで作品を作り、世間的な名声もかちえた。

日本でも最近まで、岩波茂雄が有望な若い学者の卵を育てたり、原三溪がすぐれた日本画家に十分な生活費を与え、美術鑑賞の場を与えたりした。

しかし現代では、人間の価値観が変わったのか、奨学制度のようなものはあるものの、昔のようなよい意味でのパトロンは影をひそめたのではなからうか。

新潟県出身の歌手・三波春夫氏は「お客様は神様です」と有名な言葉を吐いた。コンサートを聴きにきてくれる人、展覧会の作品を買ってくれる人、出版した本を買ってくれる人、これらのお客様がみなパトロンなのだ。

その意味では、大学の大衆化と同様、パトロンも大衆化したようである。

④ 栄重が書かれた良寛の話にはどんなものがあったのか、気になりました。内容を知りたいです。(経)

それはきわめて簡単。拙著『良寛と禅師奇話』(考古堂書店)に全文が原寸大で影印され、活字で読みと解説も付されているから、誰でも容易に読むことが出来る。

『良寛禅師奇話』は、解良家第十三代当主・三郎兵衛栄重の筆録。良寛が亡くなった天保二年には二十二歳だったが、良寛と直接接した人の記述だけに最も貴重な根本資料となっている。長短五十六話がおさめられている。

第六回 良寛の書をたずねて(V)

— 原田家・良寛史料館・良寛の里美術館 —

④ ビデオの中で「茶禅一味」「書禅一味」という言葉が出てきたが、どういった点において茶と書と禅が共通するのか知りたいと思った。(人)

ごく図式的な言い方をすると、わび茶の創始者といわれる村田珠光が、一休禅師に参禅したことから茶と禅との結びつきが生まれた。日常的な喫茶に禅的な意味が加味され、茶道としての深みが出てきたといえよう。また一休寺(酬恩庵)の虎丘庵の庭は村田珠光の設計と伝えられ、両者の禅と茶(茶室や庭の設計も茶の精神の一つの表現と見られる)との結びつきがうかがわれる。

わび茶は武野紹鷗を経て千利休によって大成される。他方、書の重要な分野の一つに「墨蹟」がある。狭義には禅宗の

僧侶の書をいう。墨蹟は書の巧拙よりも、心境美、精神性の高さを尊ぶ。茶室では床の間の軸を最も大切にしますが、古くは絵画が掛けられたこともあったが、村田珠光が、「墨蹟をもって第一とする」ようになった。これまた、書と禅との深い結びつきが生まれたといえよう。

武野紹鷗は、藤原定家の小倉色紙をはじめ、和歌ものを用いるようになったが、これも書と茶との結びつきの一つといえよう。このように、茶と書と禅とが共通の基盤をもって、互いに高めあってきたのである。

なお、古い時代の書(中国の書を含めて)が豊富に伝えられているのは、茶人が茶入や茶碗と同様に、一国一城にかえる意気ごみで大切に保存してきた功績を見逃すことが出来ない。

⑤ 良寛と茶のエピソードが特に興味深かった。茶の作法を知らなかったわけでもないのにもかかわらず間違ってしまったのは、茶席に招かれた良寛が本場に茶を楽しんで堪能していたからその行為だと思った。現代の茶席について私自身の独断と偏見から言わせてもらえば、まず作法が先立ってそれから茶を楽しむというように、形式が優先されて茶そのものに対する自分の感動のようなものが入る余地が狭いように思えるのだ。良寛はその点ユニークさを備えつつ、自分の感情に素直な人だと思った。(教)

⑤ 良寛が濃茶席に招かれた時のエピソードを聞き、初めて良寛の人柄がわかったような気がした。でも茶の作法を知っていたら、このような間違いはしないと思う。(工)

50は実に堂々たる感想文。この二点の感想文は、解良栄重の「良寛禅師奇話」第二六話の次の文による。

師曾テ茶ノ湯ノ席ニ列ルコトアリ。所謂濃茶也。師吞ホシテ見レ

バ、次客席ニアリ。口中含所ヲ碗に吐テ与フ。其人念佛ヲ唱テ吞
シト語ラレキ。

良寛が茶の作法を知っていたか否か。会津八一博士は片手でグイと茶碗をつかみ、一気にのみほした。流儀を聞かれて「利休以前流だ」と答えたという話がある。良寛は「茶の賛」という優雅な文章を書き残しており、茶に対する深い造詣のほどがうかがわれる。茶の作法はもちろん利休以前からあったわけだが、ただ現在行われているところの作法は益田鈍翁（まいたのんぶ）より後になって確立されたようである。なるほど形式にとらわれない自由な表現こそ、芸術の本質ではあるが、一つの定められた様式を寸分の違いもなく継承してゆく中に秘められた美の存在も、あながち否定しきれないであろう。

㊦ 今回ビデオで見た茶室は二畳ときき、驚いてしまいました。どうして茶室というのはあんなに小さいものなのでしょう？（理）

㊧ 茶室のにじり口は、本当に考えられたすごいものだと思う。人に頭を下げない偉い人でも、茶室に入るには刀をはずして、おじぎをする姿勢にならないと入れない。利休は、秀吉に頭を下げさせて、よほど気分がよかったです（工）

ビデオに登場した茶室は、もと解良家の庭にあった「延寿庵」で、良寛がしばしば訪ねてはお茶をたしなんだといわれる。現在は原田家の庭に移築され、分水町の文化財に指定されている。なかなか風雅な二畳の茶室である。

茶室は四畳半以下を小間（こま）といい、それ以上を広間という。秀吉は次第に豪華な茶室を好むようになり、ついに黄金の茶室を作った。それを模した茶室が、熱海のMOA美術館に見られる。

それに対して利休は、次第に質素な茶室を好むようになり、三畳二畳と小さくしていった。いわゆるわびの草庵である。「一客一亭」

（一人の客を一人の亭主が心ゆくまでもてなす）を究極の茶と考えたようである。

しかし中へ入ってみると二畳の間は意外と広く、全宇宙が凝縮された世界を思わせる。「維摩経」には、文殊が維摩の病氣を見舞いに来た時、即座に三万二千脚の椅子を部屋に入れた、と書かれている。銀河系宇宙ほどの高大な須弥山（しゆみざん）が、小さな芥子粒の中にスポツと入るとも。

もつともこの真理がわかる為には、相当の修行を積まねばむつかしいであろう。物理学的に解明出来るものかどうか、興味ある課題である。

53の感想文は、茶道と建築との素養がある人と思われる。

第七回 良寛の書をたずねて（VI）

— 妙高高原町・昭徳稻荷神社 —

㊨ 「南無妙法蓮華経」はどこで切れるんですか？（人）

㊩ 良寛に本が濡れるほど涙を流させた法華経の魅力とは何なのか、とても知りたいと思った。法華経というと私は宮沢賢治のことが頭にうかがぶが、やはり法華経はいろんな人に影響を与えているのだと思う。（教）

㊪ 正法眼蔵を読んで涙を流し、本をピシヨリぬらして、翌日人が訪ねてきたとき、「どうして本がぬれているのですか」と聞かれて、泣いてなんかないよ、（夕べの雨もりで濡れたんだよ）と答えるのは、良寛さんほうそをつくのがへただなあと思った。（工）

まず「南無妙法蓮華経」は「南無」（帰依する、帰命する）と「妙法蓮華経」（正しい教えの白蓮）となるようである。サンスク

リットの原文「サッタルマリブンタリーカ」を鳩摩羅什が「妙法蓮華」と訳した。「妙法蓮華」を更に直訳すれば、妙なる原理の蓮華となるるか。

法華経は、釈尊がインドの霊鷲山^{りやうじゆせん}で、千二百人の僧、八万人の求法者にむかって説いたお経といわれる。この後釈尊が入寂する際に説いた遺言に当たる遺教経^{いゆきやうきやう}（涅槃経）があるが、約六〇七千巻といわれる経典中、いわば最後に集大成されたお経と位置づけられる。道元も「法華経これ大王なり、大師なり。」（『正法眼蔵』帰依仏法僧宝巻）と述べて、最も重要視している。

法華経の魅力はそう簡単に語れないが、私は岩波文庫の『法華経』上中下三巻を愛読している。サンズクリット原文の口語訳と、漢訳の読み下し文とが併記されていて便利である。

法華経の信奉者としては、聖徳太子、日蓮、道元、良寛、宮沢賢治等があげられる。聖徳太子は法華経の注釈書「法華義疏」を著わし、日蓮は法華経によって日蓮宗をおこし、道元は入寂の部屋を妙法蓮華経庵と名づけ、法華経を唱えながら息をひきとった。良寛は法華経を讃歎した漢詩集「法華転」67首、「法華讚」102首を作った。宮沢賢治の詩や小説は法華経を題材としたものが多く、演劇、漫画、アニメ化されて最もはなやかである。

56の感想文もなかなか面白い。

㉗ 不思議に思ったのですが、「法華経木版本」は、横画と縦画の交わるところで、横画がうきでたようになっていている所があります。それはどうしてですか。（教）

良寛がテキストに用いた「法華経」が、新潟県出雲崎の良寛記念館、岡山県玉島の円通寺に伝えられ、それぞれ良寛自筆の書き込みがあり、学習のあとがうかがわれる。木版本はまず原文の文字を毛筆で書き、それを版木に裏返しに張り、彫刻刀で一点一画を彫り出

す。文字の部分が凸になる陽刻である。版木が出来上がるとその上に墨を塗り、紙を当ててパレンで摺り出す。それを製本して一冊の本が完成する。版画に似た工程である。

現代の活字印刷、オフセット印刷、ましてワープロだのコピー機など全くなかったのだから、一冊の木版本を作る労力は大変であった。宇治の黄檗山万福寺には鉄眼禅師が十余年かけて開刻した「大蔵経」（一切経）の版木が保存されていて壮観である。

木版本でも横画と縦画とがきっちり交わって刻された例があるので、この木版本法華経の縦画が少し離れている理由はわからない。

㉘ 「口を開いてはだめ」というのは、法華経の単なる讚美や評価をするという行為を禁じたものではないだろうか。讚美や評価は、純粹な意味で人々の救済につながるものではない、ということではないだろうか。「ナムアミ……」「ナムミョウ……」という言葉は、その宗教的には、口から出る（開口）ではなく、心から出するものと解することもできよう。（法）

㉙ 「口を開くも法華を誇り」「口を杜^とずるも法華をそしる」「合掌して曰く、南無妙法華」これらの詩はわかりやすく、かつ、良寛の気持ちがよくあらわれているなあと思った。でも実際、ただ「南無妙法蓮華経」と唱えるだけで法華経を讃えられるとは、僕は思いません。（経）

㉚ 「口を開くも法華を誇り」というのは何となくわかったけど、「口を杜^とずるも法華をそしる」について、なぜ口を閉じて黙っていることが法華経をそしることになるのか理解できなかった。（理）

これら三点の感想文は、良寛の「法華讚」冒頭の第一句「開口」をめぐって述べられたもの。それぞれ貴重な内容を持っている。

この解釈はテキストに書いたものでここではくり返さないが、良寛は法華經の教えを言葉でも、言葉を使わない以心伝心でも、いづれも説明できるものではない。ひたすら南無妙法蓮華經を唱えるだけだ、と言っているのである。これは絶対的な帰依ではあるが、そう唱えることは「開口」なのか「杜口（閉口）」なのか、その両者を超えるものなのか、またそう言ってしまうすべてが解決される一種の逃げなのか、なかなか複雑な問題を含んでいる。しかし実際には、良寛はこの「開口」と、末尾の「闕筆」とを含め、計一〇二首の漢詩を作ったのだから、これは明らかに「開口」以外の何ものでもなからう。

⑥ ビデオのなかで、曼荼羅の画家前田常作氏の作品が紹介されましたが、曼荼羅がどういうものかあまりよく知らないので説明してもらえないでしょうか。(Ⅰ)

辞書をひけば、と言ってしまえばそれまでなので、中村元氏の『仏教語大辞典』から抜粋してみよう。

〔曼荼羅〕②神聖な壇に仏・菩薩を配置した図絵で宇宙の真理を表わしたもの。曼荼羅は、本質・精髓の意で、輪円具足と訳すと古来解釈されているが、「本質を有するもの」という語源解釈にもとづく。

曼荼羅は真言密教で説く内在即超越的な絶対である法身、大日如来のさとの境地を図画したものであり、また真言行者の宇宙的心理映写図と解することもできる。これに胎藏界・金剛界の二種がある。胎藏界は『大日経』の説に、金剛界は『金剛頂経』の説にもとづいて作図したもの。

真言密教ではこれを禮拜対象とし、また観想の対象とする。密教象徴主義の極致を示すものである。

要するに一枚の画面にたくさんの仏像が描かれている。ふつう、胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅と二幅が対になっている。ごくわかりやすくいえば女の世界と男の世界とで宇宙を構成していることになる。すると女人禁制などというのは教義に反するであろう。

前田常作氏は武蔵美大の長年の抽象画家。マンネリに陥って悩んだ時、東寺の曼荼羅図を見てハッと悟り、スランプを脱出したという。以後曼荼羅の画家と称されるようになった。

第八回 良寛の書をたずねて(Ⅷ)

— 良寛遷化の地・和島村 —

⑦ 「九二の画」で、熱心に語る良寛を見ると、良寛はどちらかというと「人なつっこい」タイプだったのではないか、と思える。それなのに死ぬまで庵で一人でひっそり暮らしたというのには、深い意図があるような気がする。(Ⅱ)

⑧ 九二の画なのですが、二人の客のうち一人が九二自身であることから、実際の場面をその場で書いたのか、訪れた後思い出して描いたものなのか、ちょっとわかりませんでした。しかし今までの講義でもそうでしたが、描かれた絵(画)によって様子を知ることができるのも、写真、映像があふれる現代において考えてみるとおもしろく感じました。(理)

九二が描いた「島崎草庵の図」についての感想文。良寛には孤に徹する面と、人なつっこい面と両方あったと思う。

世の中にまじらぬとはあらねどもひとり遊びぞ我はまされる世の中に同じ心の人もがな草の庵に一夜かたらむ

の二首を比べると、同一人の歌とは思えないほど両極端である。

庵で一人暮らしをしていたのは「山上独居」「独処草庵」の禅の

思想を生涯つらぬいたことと、中世以来の隠遁思想とが結びついたものと考えられる。

またこの図には九二の贅が書かれており、それによると、「己丑（一八二九、良寛72歳）の冬、早川樵巴と二人で島崎の草庵を訪ねた。その二年後辛卯（一八三一、良寛74歳）正月五日（六日の誤）良寛が示寂したが、会葬できなかった。百日忌にあたり、当時を思い出して痛惜の念にたえず、筆をとった」旨が漢文で綴られている。したがって二年前の出来事を追想して描かれたことがわかる。

この図は63の感想文の通り、良寛が最晩年を過ごした木村家草庵の様子を知る唯一の資料であり、絵画表現によって、室内の様子、良寛の表情等がリアルに描写されている。

64 慈悲の心が一番もとになって愛心がおこり、それが愛語となつて表れる。愛語は廻天の力、すなわち天地をもひっくり返すような大きな力を持っている。それだけに言葉は大切にしなければならぬ、と書いてありましたが、本当にそのとおりでございました。最近言葉が乱れやすくなっているので、気をつけたいと思いました。（教）

65 良寛の書の中に「正法眼蔵」の中から書き写したのを見たが、その中で愛語すなわち言葉というものが、廻天の力をもっているという解説があった。それで思い浮かんだのは「始めに言葉ありき」という聖書の一節で、どんな宗教も、というか、人間全体にとって言葉は重要なのだな、と改めて感じた。（法）

66 良寛さんがいうように、愛語というのはこの社会では大切な考え方だと思います。例えば「罪をにくんで人をにくまず」という言葉がありますが、実際ににくしみの心を抱いた人から発せられる言葉には、やはりにくしみがこめられていると思います。

言葉は人が発するものです。それゆえにその人の精神状態がもろに影響を受けると思えます。そうした言葉の持つ力強さと繊細さというものを少し理解できたと思います。（経）

以上の三点は、良寛が道元の『正法眼蔵』の四攝法巻中の「愛語」を書きうつした作品についてのもの。多くの学生が素直に受け止めてくれたようである。

67 良寛さんは何でも「少々御恵たまわりたく候」と言えば、何ももらえたというのは、なんかちょっとうらやましい気がします。そんなことができたのも良寛さんの人柄があったからこそできたことだと思えます。今の時代にそんなことをしても許されるような人柄の人がいるんでしょうか。（教）

68 一筆手紙を書くだけで金品が届くなんて、良寛は人徳のある人だと思いました。また、疑問だったのは、昔の人は赤ちゃんにも白雪羔のようなものをといたお湯をのませたのかということだ。母乳とは全くちがう気がする。（法）

69 良寛さんはきつと食いしん坊に違いないと思った。だから白雪羔も本当は自分で食べたんじゃないでしょうか。（法）

70 白雪羔というお菓子の話を聞いていると、とても食べたくなりました。

お乳が出ない母親のために、白雪羔をお湯に溶いて、赤ちゃんに飲ませようとしたのだといわれるそうですが、白雪羔は何で（原材料）できているのですか。（工）

以上四点は、良寛が「白雪羔少々お恵たまはりたく候」と書いた

手紙文についてのもの。学生の感想文は正直というか、可愛らしいというか、読んでいて楽しい。

「白雪羔」（白雪糕）は『日本国語大辞典』に次のように説明されている。Ⅱ干菓子の名。精白した粳米粉と糯米粉に白砂糖を加え、ハスの実の粉末を混ぜて作ったもの。砕いて湯にとかし、母乳の代用としても用いられた。「七人目白雪糕でそだて上げ」

これによると母乳と同じ成分とはいかないが、かなり代用がきいたようである。これでも乳児が育つとはすごい。

なお出雲崎町の大黒屋が、この白雪羔を復元して製造販売している。

① 最後に質問ですが、良寛は晩年下痢をしていたということですが、死因は何なのでしょう。（法）

下痢症状をとまなう病気としては、疫痢（赤痢）、急性腸カタル、直腸ガン等が考えられる。良寛の弟由之の日記「山つと」には「痢病」と記されており、最も身近に看病し、最期を看取った人の記録だけに信がおけるが、藤井正宣氏は医師の立場から直腸ガン説を提出されている。

良寛が書き残した詩歌からは、夜など、裏のかわやへ走ってゆく間もないほど、激しい下痢と腹痛にころげまわって苦しんだ様子がかがわれる。

とてもきれいだとはなく、クソまみれになって亡くなったようである。

② 今日の人々の心はとてすさんでいると思う。子供を愛し、書を愛し、人を愛した良寛の人生をみていくと、とてもそんな気がしてならないのだ。物があふれかえり、欲しいものはほとんど手に入れることができる今日だが、何か大切なものが欠けてしまっている。

るような気がしてならない。良寛について学んでいくにつれ、私はどんどんそう感じるのだ。

良寛はその死の間際、一体何を思い、何を願ったのだろうか。良寛が最期に周りの人につづった書は、感謝の気持ちであふれ、とてもやさしさがにじみでている。（法）

③ 良寛が「み仏のおられる国へ行くのだから、うれしくありがたいことだ」という意味の歌を詠んでいたが、彼の書と思想がゆきつくところまで行きついたからこそ、このような境地に達したのだと思う。

僕もあの世に行くときには、そのように悔いのなく旅立ちたいと思う。（工）

④ 今回、一番心に残ったのは、良寛の墓の映像です。兄弟仲よく、となりにならび、静かに時が流れてきた事を感じさせました。

生前はいろいろなドラマがあり、山本家という名家をとび出した良寛と、それをつぶしてしまった弟と……

しかし、ここにきて、けっきょくは墓に入り……人間の運命を感じました。（農）

以上三点は総合的な感想文といえよう。今回の授業が、良寛の最晩年から示寂の時期だったことと、すでに八回めまで続いたことから、真面目に受講している学生のおのづからなる深まりを感じることができる。

第九回 良寛と貞心尼 — その透明な師弟愛 —

⑤ 良寛と貞心尼との歌のやりとりから、今話題の「Eメール恋愛」を連想した人も多いのではないだろうか。

ところで、良寛と貞心尼に肉体関係があったのかというのに関心事だが、果して良寛は一生童貞だったのか、ということの方が気になる。(人)

私は今だにワープロにさわったこともないので、Eメール恋愛とは思いつかなかった。やはり時代だなあと思う。

良寛は仏門に入ってからとはかく、若い頃は名主の御曹子として周囲からかなりチャホヤされたし、当時の出雲崎は佐渡金山で採掘された金を江戸へ運ぶための揚陸地としてにぎわい、遊郭や芸者も多く、良寛は時に派手に遊んだといわれている。弟の由之が放蕩に身をくずしたほどである。また確証はないが、良寛結婚説もささやかれている。

そんな状況から推定すると、童貞だった可能性は少ないといえよう。

⑦⑥ 歌を詠んだり、まりをついたり、野に出たりすることに幸せを感じられるのがすごい。私だったら、食っては寝て、食っては寝て、を繰り返していた方がよっぽど幸せだ。(人)

⑦⑦ 出家してお坊さんになるということは、俗世間から離れるということ、恋愛なんかはしてはいけないものだと思っていました。しかし良寛と貞心尼のように、素敵な恋をしてそれぞれにより良い生き方をするというのはうらやましいと思います。きっと二人とも幸せだったのではないのでしょうか。それにしても40歳の年の差はすごいと思いました。自分には全く考えられないことです。(人)

⑦⑧ 良寛と貞心尼との間で詠み交された歌はどれもよかったのですが、特に「あづさゆみ春になりなば草の庵をとく出て来ませあひたきものを」という歌と、死ぬ時に残した、この世とあの世、そし

て生と死は表裏一体だという歌(「裏を見せ表を見せて散るもみち」の句)が心に響いてきた。

またそれぞれの歌から、良寛の気の良さ、素直な感じが伝わってきた。

良寛ほどの人でも、やはり女性を好きになるんだ、と思った。(人)

⑦⑨ 最初良寛と貞心尼の年の差が40ときいてびっくりしたが、心をゆるしあえる仲になるのに年の差は関係ないんだなあと思うようになった。肉体関係があってもなくても、そんなことより大切なものを二人は互に見つけあったのだと思う。二人の歌のやりとりは、よんでいても楽しかった。

それにしても、火事で良寛さんの手紙が焼けてしまったのは残念だった。(教)

貞心尼が柏崎の釈迦堂に住んでいた嘉永四年(一八五一年)、54歳の時、柏崎大火がおこり、町のほぼ半分が焼きつくされた。貞心尼はたまたま長岡へ父の墓参に出かけて留守中だったので、持ち物のすべてを焼失してしまった。貞心尼が編集した最初の良寛歌集『蓮の露』は、常に肌身離さず所持していたため、災難をまぬかれた。

⑧⑩ 私は高校時代、良寛と貞心尼の二人をテーマにした合唱に取り組んだことがあり、この二人の関係には深く興味を抱いた。(教)

良寛と貞心尼の二人をテーマにした合唱とは、カンタータ「良寛と貞心」のことであろうか。中村千栄子作詩、石井欽作曲のカンタータは、昭和55年11月8・9の両日、柏崎市民会館大ホールで演奏された。良寛没後一五〇年を記念する大イベントだったから、ちよう

ど二〇年前となる。三人のソリストと合唱団、交響楽団、児童達の踊りと、大規模な公演であった。

その後平成7年に再演されているので、その時の出演であろうか。あるいは高校のクラブ活動の発表会等であろうか。いずれにしても、音楽を通して良寛と貞心尼に親しむとは、羨しいかぎり。

⑧ 『蓮の露』の原本の表紙には何も書いてないようですが、それならばなぜ『蓮の露』という題名がついているのでしょうか。(法)

これは失礼。その説明をしなかったのは私の手落ち。

『蓮の露』の原本を拜見すると、本文を書き終えた次に二頁にわたり、書名の由来が書かれている。

此草子何とか名づけ給ひてよと静里うしのもとへつかはしけるにかくなん

という題で、途中は省略するが、その末尾に、

いとかしこきわざながら、はちすの露ともいはまほしとてなむ
これをこそま事の玉と見るべけれ

つらぬきとめし蓮葉のつゆ 静里誌

と書かれている。後に貞心尼のために不求庵ぶくあんを建てたりして親身に世話をした山田静里に、この冊子の名づけを依頼し、それにこたえたことがわかる。なおこの文は山田静里だが、筆跡は貞心尼の自筆である。

⑨ 良寛と貞心尼の恋愛はとても純粹でうらやましいと思えます。自分たちの気持ちを歌にして互いに伝え合っていたというのがロマンチックでした。歌の才能もあって、仏の道にも歩んでいく、まさにベストカップルかもしれません。

学問は恋の妨げという歌は、その通りかもしれません。恋をする

とやはり、どうしても恋の方を考えてしまい。学問の方がおろそかになってしまふと思えます。そのくらいになってしまふ恋がしてみたいですね。(経)

⑩ 一休さんの話題もありましたが、一休さんの奇行というのは決して狂人のそれではなく、応仁の乱をはじめとする乱世への道のりの中、形式や先例などに凝り固まり腐敗しつつある仏教への痛烈な批判だという事を耳にした事があります。良寛さんの時代は一応は平穏な時代だったのでしようが、停滞というのは腐敗の温床にならないとも限りません。そこへ貞心尼という新しい風が吹いた事により、良寛さんが新たな境地にたどりついたという事が言えるのではないのでしょうか。(経)

堂々たる論陣に脱帽。

一休と良寛とは、伽藍がらん禪ぜんに対する風狂禪、破戒僧の代表とされる。しかし一休はたとえ名目だけでもいったん大徳寺の住職となり、晩年は薪たきぎの酬恩庵(一休寺)の住職だったから、生涯寺に住むことになかった良寛の方がいっそう伽藍がらん禪ぜんから遠かったといえよう。

⑪ 貞心尼の書やゆかりの品を寄贈した回船問屋の中村藤八氏とはいつごろの人で、どういう人だったのでしょうか。(経)

中村藤八氏は現柏崎市の人。政治、実業、文化の多方面で活躍した。政治面では改進黨の重鎮となり、実業面では回船、運送、石油、米穀、肥料等、特に石油業は現在の中村石油へとうけつがれている。文化面では書跡、図書、郷土資料等の収集につとめ、大正七年、一括して刈羽郡立図書館に寄贈した。現在柏崎市立図書館の中村文庫がそれである。また自ら聞書ききがきしてまとめた『浄業餘事』があり、明治四十四年五月廿一日、時年五十九の記載がある。大正九年、68歳

没。逆算すると嘉永四年（一八五二）の生まれとなるうか。

令孫の中村昭三氏は中村石油社長、柏崎市教育委員、同市議会議員長等の要職をつとめ、『良寛と貞心』『貞心尼考』等の編著をはじめ、貞心尼顕彰に大きな功績を残された。なお、カンタータ「良寛と貞心」の作詩者中村千栄子氏は、昭三氏の妹にあたる。

⑧⑤ 貞心尼は良寛自身ではなく、良寛の歌にほれたのではないか。現実的に考えて四十歳という年齢差のある人の事が好きになるとは考えられない。きっと良寛も貞心尼は自分の歌にほれたのに気付いていたので、男と女の関係をもたなかったのだと思う。(一)

⑧⑥ 二人の心が合っていたことはよくわかりましたが、良寛もなかなかのくどき上手ですね。「夢のまままでいよう…」だなんてロマンチック♡(一)

⑧⑦ 良寛と貞心尼の関係は清らかな愛といわれているが、愛は清らかなものでなければならず、それ以外は愛と呼んではいけないと思う。(一)

⑧⑧ 「うらを見せおもてを見せ散るもみじ」の句は、前から知っていました。今日はすごく感動しました。

枝についているもみじの葉が紅くそまり、裏表を見せながら美しく散っていくのは、まさに良寛が貞心尼と出会い、恋を燃やしなからすぐれた歌を作り、そして死をむかえていくのを表しているように感じました。(農)

このほか自分の恋愛経験、文通経験を通しての感想文が多かった。やはり恋や愛の話になると多弁になるようだ。こちらはもうすぐ卒年だとしよぼくれているのに、若い人が羨ましい。

第十回 良寛と相馬御風

—良寛研究にささげた後半生—

⑧⑨ 相馬御風の良寛への純粋な尊敬の想いを感じ、すがすがしい思いがしました。現代のせわしなさの中で良寛に触れ、その作品を味わうことは、「オアシス」のような心のうるおいを感じます。こういう学習こそ「大学」とい感じがします。(人)

⑧⑩ 平成三年に見つかった京都紀行の文から、良寛が聖徳太子をどう思っていたかが分かったということが、とても興味深かった。(人)

⑧⑪ 私は御風の生き方がとてもいい生き方だと感じました。それは東京から突然故郷に帰ってきて「故郷こそ人間が人間らしく生きていける場所である」と書いているところがとても好きになりました。

京都紀行はなぜあのような小さな紙に書かれたのか不思議でした。(法)

⑧⑫ 京都紀行はあんな小さな紙きれなのに、重要発見がかくされていることにびっくりしました。(経)

89はこますりでなければ嬉しい感想文。90〜92は「京都紀行」をめぐる感想文。「京都紀行」については教育人間科学部紀要第一巻第一号「良寛の関西紀行考」に述べたが、タテ25センチ、ヨコ1.7センチのこよりほどの小さな紙片にたった二行が書かれている。しかしその中に良寛が常住寺を訪ねた記事があり、しかも聖徳太子が建立したと信じて訪ねているので、聖徳太子と良寛との結びつきが新

事実として浮かび上がってきた。

もとは「須磨紀行」「高野紀行」などととも一紙に書かれていたが、この二行分が切断されたもので、はじめからこんな小さな紙に書いたわけではなかった。

93 相馬御風については、名前すら知らなかった。御風の書齋が落ち着いた雰囲気ではよかった。今も残る文人の書齋というのは、その人の生き方やしてきた仕事の一片を思わせるものだと思う。(人)

94 (御風の良寛研究が) 学術論文のためでなく、人生を学ぼうとする研究であったとあるが、その方がずっと大切なことのように思える。(人)

95 御風という方を知りませんでした。虚栄心を捨て、三十三歳で故郷に帰るといふのは珍しい、すごいと思いました。しかしそれにより良寛の研究に出会うのは、まさに運命的なものであると感じます。

祭文は良寛を芸術、浄さ、仏、大聖人として、また人としてとらえているのには、あっ、なるほど、そのとおりだと感心しました。(教)

96 御風の良寛に対する思いは人並み外れて凄いなと思う。芸術と宗教の修行の一致が御風の理想であり、また良寛がそれをなしてあげていることが、御風が良寛を尊敬する大きな理由のひとつだったと思う。(教)

97 良寛さんがひきつけるタイプの人は、相馬御風や貞心尼など、その人自身も聖人であるようなタイプの人だと思った。(法)

98 良寛との出会いは、御風の暗中模索していた人生に、一筋の光をさした、とても運命的なものだったのではないだろうかと思う。(法)

99 私が思うに、相馬御風はきっと都会の生活(他人を犠牲にして自分のし上がる。あるいは人と人とのだましあい)に嫌気がさして、故郷の風土(かつて自分が過こした純粋なもの)をなつかしく、すばらしく、優美に思い帰郷し、その後良寛の研究をすることで、糸魚川のみならず、かつての新潟の風土をより一層感じたかったのだろう。(経)

100 また「類は友を呼ぶ」という言葉があるように、良寛は相馬御風を呼び、相馬御風は良寛を呼んだのかもしれない。(工)

101 私は、良寛さんと手毬と子供たちの姿を想像することで、日本の安らぎの象徴というような感じがしました。(教)

それぞれすばらしい感想文ばかり。

102 ビデオの中で作品(手紙)のいくつかに、最初と最後に良寛と書かれているが、その意図は?(経)

これは説明したことがあるように思うが、一枚の紙に手紙を書き、左方から折り畳んで一番表面に宛名と差出人(この場合良寛)を書く。それを広げると、その宛名の部分だけ裏文字になってしまふ。その為、表装する際その部分を切断し、裏返しにして張り合わせる。したがって本文の最後に書いた良寛と、表紙に書いた右端の良寛とが、重複して見えるのである。

要するに、本文の良寛と封筒の良寛とが一枚になったと考えれば

よい。

⑩ 僕は今日授業を受けるまで相馬御風なんて知らなかった。あの有名な早稲田の校歌を作った人だったのか。どうしてあの若さで有名な早稲田大学の校歌を作ったのだろう。大学の方から要請があったのだろうか。(経)

相馬御風は島村抱月を助けて第二次「早稲田文学」の編集にたずさわり、更に坪内逍遙の主宰する文芸協会にも参加していた。そんな関係で早稲田大学創立二十五周年祝典に際し、坪内逍遙、島村抱月から命ぜられて「都の西北」を作詞したといわれる。二人の恩師に見込まれたのだから、この上ない名誉であった。

なお平成9年10月19日、早稲田大学正門左側に御風自筆の校歌碑が建立された。高さ二・五メートル、横四メートル、奥行二・六メートル、重さ30トンの巨碑で、糸魚川のスイの原石が用いられている。

第十一回 良寛と安田靉彦

— 画家からみた良寛像 —

⑩ 途中で紙の色が黄↓紫に変わる書があったが、どんな意図があるのだろうか。(人)

安田靉彦画伯が書いた新宮殿千草の間に掲げる「万葉歌」の書額のこと。ふつう書は白い紙に黒い墨で書くのを原則とするが、日本では平安時代「古今和歌集」などの写本に、美しい料紙が用いられるようになった。さまざまな色をつけた染紙、模様をつけた唐紙やローセン、金銀の切箔、ノゲ、砂子をまいたり、下絵を描いたり、墨流し等、更に教種類の料紙を継ぎ合わせる切継、破継、重継等、

紙自体に美しい装飾をほどこし、一種の工芸美を發揮するようになった。安田画伯が用いた料紙は縣治郎氏制作の色変わりの染紙であった。

⑩ 「死ぬときには死ぬのがよい」という良寛の深さに感動した。あきらめではなく、母親のような情の深さを感じた。(人)

⑩ 今日の講義で「死ぬ時節には死ぬがよく候」という言葉が出てきたけれど、私もこのような考えを今まで持っていたので、改めて納得したという感じでした。若くて死ぬ人もいれば一〇〇歳まで生きる人もいますが、それはその人が生まれ持った寿命なのだから、死ななければならない。母もこのように考えを今まで持っていたので、改めて納得したという感じでした。若くて死ぬ人もいれば一〇〇歳まで生きる人もいますが、それはその人が生まれ持った寿命なのだから、死ななければならない。母もこのように考えを今まで持っていたので、改めて納得したという感じでした。

⑩ 死ぬ時節には死ぬがよいというのは理解できる。死すべき時に死ねないのはつらい。時至ってなお生に執着するのは美を欠くことでもある。そして暴論だが、死ぬ時節が訪れるのは、その者が世界にとって果たすべき役割を達したからだと思う。(法)

⑩ 阪神大震災のような時、どのような言葉さえもが、うつろにひびくものだと思います。無言こそが、もっとも雄弁であると思うのですがいかがでしょうか。(理)

⑩ それと地震の見舞い状の中に「死ぬ時節には死ぬがよく候」と書いてあるけど、それはかなりなげやりな考えだと思います。(理)

⑩ 生死の差別を説く言葉には、偉さとともに優しさがあると思う。(人)

⑩ 「時節到来」というのは、つまりキリスト教のカルヴァンの予定説に近いものがある。仏教で言えば浄土思想「他力本願」である。良寛は禅宗であるが、思想は違ふものを取り入れている。単純に見れば己が道がくじけたか、くらがえしたかのように見えるが、仏教の根本的思想は中道である。その根本に根ざしていると言える。(人)

⑪ 今日の講義で時節到来という言葉がありました。私個人的には、運命は自分で切り開くものだと考えていますので、その言葉自体は嫌いです。その時、その時になってみると、時節到来かなあと思ったりします。(経)

以上105から112までは、良寛が三条大地震の見舞状に「死ぬ時節には死ぬがよく候」と書いたことをめぐる感想文。平成七年一月におきた阪神大地震の時、日経新聞「春秋」欄、毎日新聞「余録」欄、産経新聞「産経抄」、新潟日報等が、良寛のこの手紙をとりあげて論評した。「時節到来」は道元の語。

108の「無言こそ」はなかなかの名言。禅では、話してもわからない時はどうするか、黙るしかない、という。私はその主義なので、しばしば損をしたり、誤解を受けたりする。自分の意見を徹底的に主張する欧米人には理解出来ないかもしれない。

111はなかなか思索的。カルヴァンはフランスの宗教改革者。キリスト教のカルヴァン派の祖。

⑫ 夏目漱石が良寛にほれこんだ人物だということを知っておどろいた。「天才は天才を知る」という言葉があるが、やはり何か共通するものを感じる者同志は、たとえ「書」ひとつであっても、互いを感じとることができるのかもしれない。(経)

⑬ 漱石の「則天去私」が良寛に通ずるという話は「なるほど」と思った。漱石自身が良寛に言及している書はないのですか？(教)

夏目漱石は大正の初め、上野の博物館で初めて良寛の書を見、「これなら頭が下がる」と言った話は有名(津田青楓著『春秋九十五年』)。安田靉彦の場合と同様、瞬時の出来事であった。漱石の手紙のごく一部を紹介すると、

「良寛は世間にも珍重致し候が、小生のはただ書家ならといふ意味にてはなく、寧ろ良寛ならではといふ執心故、菘翁だの、山陽だのを珍重する意味で、良寛を壁間に掛けて置くものを見ると、有つまじき人が良寛を有つてゐるやうな気がして、少々不愉快になる位に候。」(大正五年三月一六日付、森成麟造宛書簡)

「(良寛和歌につき)十五円だらうと百円だらうと、乃至千円、万円だらうと、もとく買手の購買力と、買ひたさの程度一つにて極り候もの。」(大正五年四月十二日付、森成麟造宛書簡) などと熱烈な思いを述べている(拙著『良寛の書』第三集所載)。

⑭ 「雪の中に……」の作にあるように、あれだけ文面で断わっておきながらも、結局は書を書いてしまうのは、とどのつまり、良寛は書を書くことが好きで好きでたまらなかつたのだらう。(法)

⑮ 良寛に断られると「書かないということを書いてくれ」と言った使いの者もなかなか頭が良い。最初から断わられることを計算していたのかもしれない。その使いの言葉聞いて良寛は、一本取られたと思ひ、結局書いたのであらう。使いの者はさぞほくそ笑んだことだらう、と僕は思った。(理)

⑯ 「定珍老あて書簡」は良寛さんの断り方が面白かつた。けれども僕にはいやいや書いているように思えなかつた。断つても断

りきれず書いている良寛さんの性格がよい。(工)

⑩ また良寛が、筆が擦り切れて書けないといっているが、擦り切れているのは文章のはじめの方だけだと思った。(工)

115 118は良寛が揮毫を断った手紙に関する感想文。いずれも好意的に受けとめている。118は観察がするどい。擦り切れた筆でも墨が次第になじんでくると、ある程度カバー出来るのである。

⑪ 画伯は18才で薬師如来像を購入したという話がありました。そのことについて「何か変わった人だな」と思いました。現在の18才の人々が仏像を買うことはまずないからである。(法)

画伯は小さい頃から体が弱く、12才で小学校高等科を退学している。薬師如来は文字通り薬師で病気をなおす仏様だから、心が動いたのではなからうか。また古美術収集の趣味があり、門下生にも「こやし」になるといつてすすめているくらいなので、入手したのではなからうか。

この薬師如来は安田家の守り本尊となったようである。

⑫ それから「何も無いところに全てが存在する」というのはよくある思想ですが、かなり深いです。私的解釈では、「無いという概念Ⅱ有るものが存在しないことからくる」つまり有の裏がえしが無であり、無ということが有ということを暗示しているのではないかと思います。また無いことを認識できるのではないのでしょうか。余白美というのも、ここらあたりから来るものかもしれない。(法)

これは良寛書の慧能の偈「本来無一物」、一休の偈「無一物時全

体現」についての感想文、私は教育人間科学部紀要第二巻第二号『良寛の「白扇讀」考』でこの問題を論じている。

⑬ 良寛の手紙には、11月や12月など冬の日の日付が多い様な気がする。気のせいなのか。(経)

いやいや気のせいではない。なかなかするどい指摘。良寛の書簡一八五通について差出しの月を調べてみると、12月―40通、11月―31通、10月―26通、1月―25通の順となり、12月、11月が断然多い。10・11・12・1月の冬期4か月を合わせると全体の65%をしめる。冬は降雪にとじこめられて托鉢にも出かけられず、手紙に用件を托したのであろう。それとて現代のように郵便ポストがあるわけではなく、ごく稀れに見える人にことづけたのであろう。

⑭ 良寛堂の説明文の平等院と書かれたところは今もそのままなのですか。加藤先生にとって、安田氏からのこの衝撃的な事実は、最大のものだったのでは。(経)

これは良寛生誕地跡に建てられた良寛堂の設計について、設計者の安田画伯から竣工52年後に訂正のお手紙をいただいた件。既に拙著『安田靉彦画伯の書簡』に紹介し、現地の立札からも「宇治平等院鳳凰堂に範をとり」云々は削除されている。

⑮ 安田氏は良寛の書の気品に魅せられた、と言っていました。私はこの話に才能を持つもの同士の引き合う力、オーラのようなものを感じてしまいました。私の心のアンテナを広げて、様々なものに触れてみたいと思いました。(理)

⑯ ビデオを見るたびにびっくりさせられてしまう。本当に良寛

というお人はすばらしい。何人の人をとりこにしてしまうのか。今回の被害者は安田鞆彦さんという画家らしいが……。(工)

オーラをあびても何も感じない人、気づかない人が多いのではなからうか。

第十二回 良寛と会津八一——独特な良寛観——

⑫ 悲しみはよい作品を残すというような八一の言葉を聞いたとき「芸術家は感情の器である」というパブロ・ピカソの言葉を思い出しました。(八一は)良寛さんをなまくらぼうずと言っていたと伺いましたが、犯罪者、売春婦、狂人をはじめ、芸術家も墮落者だと思えます。(教)

これはなかなかむずかしい問題。天才と気違いは紙一重といわれるが、墮落者ときめつけてよいのかどうか。生産性には役立たないし、実社会から逃避する傾向はあるかもしれないが……。

⑬ 八一が良寛を批判するのは、良寛があまりに完璧なのだからだと思ふ。嫉妬のような感情を持つ一方、とてもかなわないという意がこもっているように思える。(教)

⑭ また良寛について「馬鹿坊主」などと評していたのは、実は良寛に対する尊敬や親愛の裏返しだったのではないかと思えます。「良寛は良寛、俺は俺」というところに、良寛を認め、尊敬しながら、自分の型を確立しようとする姿勢が見える気がします。(教)

⑮ 良寛をしたいながら一方で批判する八一の言動には、八一の良寛に対する熱い思いと、良寛を越えてみたいという姿勢が感じら

れた。(教)

⑯ そして欠点までいえる人こそ、彼を真実理解しているのかもれない。(法)

⑰ 八一が良寛を批評するとき両極端な発言をしています、本気で批評すれば誰でもそうなります。普通です。(工)

126～130は八一の良寛評に対する感想文。いろいろな見方をとりあげてみた。

⑱ 養女のキイ子さんが亡くなってから、また養女をもらっていたようですが、本当は心のどこかで支えてくれる女性が欲しかったのではないのでしょうか。(教)

⑲ 八一の養女のキイ子は死んでしまったが、養女とはいえ自分の娘が死んでしまうのはどれほど悲しかっただろうか。きっと二人きりで過ごした最後の一週間で、たくさんの思い出を作ったにちがいない。

後に彼はまた養女をむかえているようだが、この時代は養女をむかえるのがはやっていたのだろうか。もしかしたら年の離れた養女との秘密の恋なんかあったのだろうか。(工)

八一博士は渡辺文子との恋がみのらず、一生独身を通した。身のまわりの世話をする人がいないため、キイ子さん、蘭子さんの二人の養女を迎えた。この時代は「男子厨房に入らず」だったから、事情が許せば、男性は炊事、洗濯などはしなかったのである。秘密の恋があったかどうかはわからない。

⑬ 良寛の研究をした本の書き込みをみて、これが本当の研究心、学問なんだと思った。(法)

⑭ 今日の講義で、会津八一が「良寛詩集」を四冊(同じもの)も買ってそれぞれの本に注が書ききれなくらいに書き込んで研究していたし、八一がいかに良寛をしたっていたのかがわかった。(理)

⑮ また、一つの研究をするには、彼のように本の表紙がとれるほど読み込んだり書き込んだりしなければならぬのだと、「研究」の心構えのようなものを感じることができてよかった。(工)

133～135は八一が岩波文庫の『良寛詩集』に、良寛詩の典故調査を中心にビッシリ注を書き込んだことについての感想文。なおその内容については教育学部紀要第35巻第1号～第36巻第2号に拙稿「会津八一注記『良寛詩集』」I～IVにまとめて紹介した。

⑯ 良寛の字は一つの邪道、とはどういうことなのだろう。(法)

⑰ 八一は読みやすい字を書こうとしたそうだが、一体何のためだったのだろうか。(工)

良寛の字を邪道と言ったのは、一つには懐素風にくずした草書、一つには小野道風風の万葉がなほ、一般の人には読みにくいのが、それを平気で書いていたことへの批判。したがって八一は誰にでも読みやすいように、漢字は楷書と行書、かなは平がなを中心に変体がなはなるべく使わないことを主張し、実行した。八一は歌人の立場から、自分の詠んだ歌を多くの人から正確に読んでもらいたい、という意図があったと思われる。

たしかに、草書や変体がなほ現代人には読めなくなってきたが、それらには独自の機能や美しさがあり、それらを否定してしまうと文化や芸術や学問の衰退、レベルダウンになりかねない。読めればよいことと、芸術的価値とは必ずしも一致しないのである。

大岡信氏は「人に読めない字を書くのは書家の思い上がりだ」と言われたが、それなら歌人は人にわからない言葉を使って歌を作るべきではない。小説、短歌その他の文学作品が、誰にでもわかる言葉だけを使っていたら、美しい日本語はどんどん消滅してしまわうし、入学試験に国語の問題を出すのはナンセンスになってしまう。

⑱ 墓に書かれた「渾齋秋艸道人」というのはどのような意味があるのか。(法)

⑲ 「オレには戒名なんていらぬ」っていうのもまた、カッコいい。自分の生き方に自信をもっていた人なんだろう。(農)

文学者や芸術家は本名のほかに雅号を用いる。雅号は本来、本名で呼ぶのは失礼にあたるという考えから、その人にふさわしい雅号をつけるものだが、一般には自ら雅号を用いる場合が多い。ただし心ある人は、手紙を差し出す時に雅号を使うことはしない。

渾齋も秋艸も八一の雅号。八一の略年譜を見ると、大正三年34歳の時、齋号を秋艸堂といった。齋号は家号、室号のようなもの。また渾齋は昭和一六年61歳の時『渾齋近墨』(書画図録)を刊行している。ほかに目白文化村時代は滋樹園、翠漣亭などの齋号も用いた。新潟市端光寺の墓には「渾齋秋艸道人墓」と書かれている。篆刻家山田正平氏の書である。

⑳ 新潟高校の八一の歌碑にある「ふなびとは……」の歌は、な

「最後の『なほたか久止母』の三文字だけが漢字で書いてあるのか不思議に感じた。(経)

八一は昭和28年73歳の時、宮中歌会始の召人に招かれ、御題「船出」を詠出した。宮中歌会始の詠草は和歌懐紙の書式にのっとり、本歌を三行三字に書き、四行めの三字は万葉がなと用いる定めとなっている。八一もその書式にしたがって書いたのである。こんなところにも和歌の伝統が感じられる。

⑭ 「ふかくこの生を愛すべし、かへりみて己を知るべし、学芸を以て性を養ふべし、日日新面目あるべし」という言葉は僕の大好きな言葉で、予備校時代はつらいとき、よくはげまされました。(経)

有名な会津博士の「学規」四か条。意外と早い34歳の作。博士が早大を卒業して最初に着任した有恒学舎(現有恒高校)の創立者・増村朴斎の「学規」五か条に影響を受けているかもしれない。博士の学規が若い人の励ましになっているとは何より。

⑮ 文学に生きるとは、どういった人生であろうか？私にもう一つの人生があったら文学に生きて見たいと、この講義全体でそう思った。(理)

すぐれた物理学者や数学者が、同時にすぐれた文学者である例は枚挙にいとまがない。理系の論文でも、日本語や英語の文章力が不可欠であろう。

もう一つの人生という考え方もなりたつが、むしろ理系の人が、観察、思考、感性等にまさっている場合があるので、もし文学的関心が芽生えたと思ったらすばらしいと思う。

第十三回 良寛と中国・峨眉山

— 国際交流のかけはし —

⑭ 高校の古典の授業で峨眉山の漢詩を読んだとき、この「橋杭漂流」の話聞いた。確かに天地がひっくり返るほどの奇跡だと思う。何千キロもの旅の途中で腐ってばらばらにならなかつたのも奇跡。拾った人がたまたま字の読める人で、薪として燃やされずすんだのも奇跡。

ところで「峨眉山」「峨眉山」「蛾眉山」……正しいのは？(人)

⑮ 日本と中国……たった一本の橋杭とたった一人の良寛が、多くの人々を動かした。この出来事は非常に意味深いものである。(教)

⑯ 蛾眉山の橋杭の話は、僕も高校の時に読んだ鈴木牧之の北越雪譜で知っていましたが、とても珍しいことだと思っし、その出来事を神秘的なものと多くの人々がみるのもおかしくなりました。またもし良寛が、そのころあの幽玄な蛾眉山の景色を目にしていたら、どんな書(詩)を書いていたのだろうと思っした。(法)

流れついた橋杭に刻されている字は「蛾」、良寛自筆の詩の題は「蛾」、本文は「我」、中国四川省の地名は「峨」、と四通りに使われている。「蛾眉」は美しいまゆ、女性の顔の美しいさま。蛾眉山を見る方角によって眉が二つ並んだように見える。「蛾眉」は蛾の触角のように細長くて曲がった眉、転じて美人のこと。やはり蛾眉山の姿が蝶が羽を広げた形に見える。「蛾」は山が高くけわしい形容。「大漢語林」を引くと蛾眉＝蛾眉＝蛾眉と共通している。「我」は柳田聖山氏の説では、良寛が何偏に書こうか迷った為、書きおと

したのではないかとされる。

峨眉山は標高三〇九九メートル。中国三大霊場の一つで普賢菩薩をまつる。そこから日本の柏崎宮川浜まで約六千キロ。たしかに奇跡にちがいない。

なおこの話は鈴木牧之の『北越雪譜』、藍沢南城の『三餘集』にもくわしく記載され、ちょっととした事件だったようである。

⑭ 中国の修学ツアーに参加した人たちの感想に感動しました。温かみを感じることができたり、「生きていてよかった」と思えることはすばらしいし、そういう感動を多くの人に与えることができる良寛さんもすごいと思いました。(教)

⑮ 良寛の詩碑が峨眉山に建立されたときに、日本人だけでなく中国人の人々もとても歓迎していた様子を見て、良寛の心は国際的なものになっていると感じた。(教)

⑯ 峨眉山から雲海をながめた写真がすごくきれいで、山の下に雲があるなんてすごい。不思議で美しいものだと思います。昔の人はあの険しい山を自分の足で登ったとのことで、登頂後にあんな幻想的な景色を見たら、ものすごく感動するでしょうね。

先生達が中国へ行ったときのカメラマンは下手ですね。スイッチャーもあまり趣味が良くなり少し残念でした。実物ではなく写真(資料)を写したのもあり、やっぱり残念でした。(法)

⑰ 「仏光」と「雲海」は驚きました。ああいった自然のダイナミックな美しさをまのあたりにすると、理屈云々を超越したような、有無を言わさぬ感動がこみあげてくるから不思議です。(理)

⑱ 中国は本当に神秘的な所だと思います。仏光や雲海という現

象をビデオの写真で見ましたが、山には神様や仙人が住んでいると信じる気持ちになるだろうな、と思いました。(農)

147の感想文、中国の人も喜んで下さるのが本日の日中友好。

148の後半、画像を見るように目に驚く。ただしカメラマンが下手というのは気の毒で、いろいろな事情から放送局のテレビカメラが持ちこめず、ごく一般に市販されているホームビデオのカメラで撮影せざるをえなかった。また他の十七回分はすべて実物を撮影したが、この放送公開講座用の取材は平成三年八月、実際に除幕式が行われたのはその前年、平成二年八月だったので、そのシーンをさかのぼって撮影することは不可能であり、私が撮影した写真を用いたのである。

⑲ 詩碑亭の木額は「日中詩碑亭」と右から左に書かれています。が、どうしてなのかなあと不思議に思います。(教)

中国文や日本語は、もともとタテ書きにして右から左へ行をおってゆくのが原則。したがって一行が一字しかなくても右から左へ書く。現在でも書道作品の場合、横額形式で書く時は右から左へ書き、左端に筆者の氏名を書く。しかし日本語も横書きが多くなり、英文などと同様左から右へ書くようになった。現在ではその両方が混用されている。

⑳ 質問なのですが、拓本にすると元の木に墨がついて黒くならないのでしょうか。なぜ拓本にとった字が逆にならないのでしょうか。(法)

それは木版本と拓本の違い。木版本の場合は文字を逆字に彫り、墨を塗って紙にうつす。拓本の場合は碑面に霧をふきかけ、紙をの

せて文字の部分をおしこみ、上からタンポで叩く。木や石に直接墨を塗らないから黒くならず、文字も逆にならないのである。時々間違つて碑面に墨をつけ、紙にうつしとると、碑面は黒く汚れ、文字は逆になってしまう。拓本の正しいとり方を学ぶ必要がある。

⑮ 書というものを、私は美しさ、おもしろさで評価しがちでしたが、その書家の人生、人柄、書いた状況、時代などを知った上でながめると、何か奥深いところの良さが見えてきて、とても新鮮でした。(法)

⑯ 今日のビデオを見て、良寛さんのことについて趣味を持ちました。中国に帰ったら是非一度峨眉山を訪ねたいんです。(経・中国人留学生)

⑰ あの橋杭はなぜもっと手厚く保存しないのでしょうか。また放射元素測定をして、橋杭のできた年代をしらべようとする研究者はいないのでしょうか。(工)

153、154はともに嬉しい感想文。155はいかにも工学部の学生らしい感想文。いずれそういう研究者が出てくるかもしれない。ただこの橋杭が後人の手による偽作といった疑いがあれば別だが、前述のように同時代の鈴木牧之、藍沢南城等の記録があり、良寛の作り話ではないから、その必要性はどうであろうか。一部に、中国の峨眉山ではなく、韓国の峨眉山から流れてきたのではないかとする説があるので、木材が中国のものか、韓国のものか、判定する方法があれば、と思う。

なお、このテーマについては拙著『良寛と峨眉山』（良寛研究第12集）にまとめてある。

おわりに

以上が「書道芸術」平成11年度前期の記録である。

私が授業にビデオの使用を思いついたのは、新潟市出身の新井満氏（芥川賞作家）の講演を聞いたからである。ふつう講演会では講師がマイクの前で話をする。せいぜい手振り身振りをまじえたり、黒板を使う程度であろう。ところが新井氏の講演はビデオ、スライド、CD等を駆使して、講演というよりミュージックショーのような感じであった。映像と音声の圧倒的な力に驚いた。

チョークと黒板だけの講義も、たしかにそれなりの意義はあるが、これからは何と言っても映像の時代だな、と痛感した。

幸いBSN新潟放送が制作して下さったビデオが18本あり、これは貴重な財産であることに間違いなく、さっそく活用することにした。

ただしそんな話を愚息（京都大学助手―東京理科大学講師）にしたら、「ビデオを使うのは一種の手抜きだよ」とあっさりやつつられてしまった。

それはともかく、平成三年度新潟大学放送公開講座「良寛の書と生涯」の主任講師は、それまでには大変な仕事であった。

18週放送分の現地取材とスタジオ収録。取材は県内にとどまらず、東京、神奈川、福島、兵庫、岡山等、外国は中国四川省まで出かけた。その間をぬってスクーリング五回の実施。毎週受講生の答案がドサツと届き、それを全部読んで返事を出す。タレントの才能のない私には、緊張の連続であった。

しかしその間、大学と放送局の皆さんから助けられ、得がたい体験をすることが出来た。

新潟大学放送公開講座にはテレビとラジオとがあり、テレビは昭和59年に第一回が始まり、平成7年まで12年間続いた。平成8年か

ら10年までの3年間は新潟大学単独ではなく、五大学によるプロック制にかわったが、平成10年度をもって廃止された。それまで後援してきた文部省放送教育開発センター（のちメディア教育開発センター）が事業を打ち切ったためである。それは放送大学の充実と、放送衛星の電波が全国をカバーするようになった必然の結果（運命）であった。そして平成11年度からは形を変え、新潟大学独自のテレビ講座となった。

平成三年度の「良寛の書と生涯」は募集人員一〇〇名のところ、受講生八一九名、スクーリングの出席者一、一五九名と、15年間の全講座を通じて最高記録となった。数字がすべてではないが、それだけ反響が大きかったことは事実で、十分な手ごたえを感じた。放送局の番組審議会、番組モニターの方々のご意見に導かれ、内容の向上をはかったつもりである。

医学や理系の講座はそれこそ日進月歩が著しく、常に最先端の知識や技術が要求されるが、良寛の場合は10年前の映像を見ても何ら古い印象はなく、その意味では寿命の長い活用が可能であろう。

本学部に附属教育実践研究指導センターが設置された当初から兼任教員として籍を置きながら、研究紀要に一度も投稿する機会がなかった。本稿が最初で最後の投稿になるかと思う。そしてまた、研究内容はお粗末ながら、これをもって新潟大学在職36年間の卒業論文になれば、とひそかに願うものである。（平成12年2月1日記）